ストパン世界に函南(映画版)がトリップ

えいきゅうの変人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

凍結作品。

希望によりプロローグのみ投稿。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 3

第1話

勝てない。
そう悟った。
ああ、技量にも差があった。
彼は本当に天才なのだろう。
彼女が倒したがるのもよくわかる。
そのくらい強い。

いつ墜ちてもいい。
いつ死んでもいい。
そんな気持ちが僕に空を飛ばせた。
だからか不思議と不満はない。
僕は声をあげて笑った。
僕は空の上でしか笑えない。
ただ、このあと草薙がどうなってしまうか。

それは不安だった。
でも殺せなかった。
代わりに、ティーチャを倒すと出撃した。
ある意味賭けだった。
倒せるかどうか。
それはやってみなくちゃわからない。
僕は声をあげて笑った。
元から分の悪い賭けだったのだ。
そして僕は賭けに負けて死ぬ。
空で死ねるのだから本望だ。
地上は汚い。
だけど、だからずっと空を飛んでいられたらいい。
そんな願いがかなったのだから。
僕は地上では笑えない。
だからここで今、精一杯笑っておくことにしよう。

第2話

ここはどこだろう。
僕は死んだはずだ。
ティーチャに墜とされて。
でも僕はこうやって飛んでいる。
何故だろう。
考えても仕方が無い。僕は思考を切り替えた。
ただ、この青い空を飛ぶ。
味方機もいないし敵機もいない。
ただこの空に一人ぼっちだった。
ずっと、このまま飛び続けていられたらな、と思った。

飛行物を発見した。
あれは何だ？
黒い。
黒いブロックと赤いブロックで出来た飛行物体だ。
どうやって飛んでいるのだろうか。
敵の新兵器、ではないだろう。だからと言って味方の保証もない。
敵もこちらもこの「ショーとしての戦争」のバランスを崩したくないだろうからだ。
では、あれは何なのだろうか。
少なくともこちらの知識に該当するものはない。
接近する。
やはり飛行機にしては形がおかしい。
相手の砲撃。
いや。光線か？

未知の手段による攻撃。
敵性存在と判断し反撃開始。
エレベータを使い光線を回避。
銃弾を発射する。
弾ける表面。だが当たったところが白く砕けるだけだ。
僕は歯噛みする。
だがそんな僕に構いもせず僕の手はそれを墜とそうとする。
突如、相手の体全体が砕けた。
砕ける寸前、相手の体に赤い結晶が砕けた気がした。